

玉屋謡本の研究(3)新出の古活字玉屋謡本伝本の紹介

IKAI, Takamitsu / 伊海, 孝充

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究 : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

41

(開始ページ / Start Page)

31

(終了ページ / End Page)

53

(発行年 / Year)

2017-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013766>

玉屋謡本の研究 (三)

―新出の古活字玉屋謡本伝本の紹介―

伊海 孝充

はじめに

『青裳堂書店古書目録』平成二十七乙未年霜月号に「観世流 古活字版 慶長末頃刊 素紙刷袋綴本 九十番」として古活字版半紙本の観世流謡本が紹介されたが、この本(以下「新出本」)は天理大学附属天理図書館蔵本「謡曲百番 玉屋本」(以下「天理本」)のみしか知られていない古活字玉屋謡本であった。稿者はこれまで「玉屋謡本の研究(一)―玉屋謡本諸本の関係をめぐる―」(本誌四〇号)で光悦謡本と元和卯月本との関係について考察したが、玉屋謡本の研究に取り組んでいる最中に、古活字玉屋謡本の新伝本の出現という僥倖にめぐりあうことができた。本号ではこの新出古活字玉屋謡本を紹介しつつ、この本の出現により見えてくる古活字玉屋謡本の成立背景について整理してみたい。

なお、前稿と同じように、古活字玉屋本は「古玉屋本」、整版玉屋謡本は「整玉屋本」、伊海稿「玉屋謡本の研究(一)」は「(一)」、「玉屋謡本の研究(二)」は「(二)」と表記する。

一、新出本の紹介と分析

新出本(九十冊)は『青裳堂書店古書目録』に全冊一丁表の写真とともに紹介された。青裳堂書店店主の話によると、前所蔵者が状態の悪い数冊を廃棄してしまつたらしく、本来は百冊近くの組み合わせであつたと考えられる。当初から分売されたため、現在は複数箇所所蔵されており、個人蔵になっている分も多い。そのため今回は全冊を調査することはできなかつたが、天理本との関係を中心に、新出本の特徴について【曲目】【装幀・版式】【書き入れ等】から整理してみる。

【曲目】

新出本九十冊を現所蔵先別に分けると、次のようになる。(曲名に「」を付したものは題簽がない曲。曲名は天理本の題簽表記で補う)。

法政大学能楽研究所(十八冊)

阿漕・あたか・蟻通・江口・西行桜・すみ田川・玉かつら・とほる・ぬえ・野のみや・白楽天・はせを・班女・藤戸・舟弁慶・頼政・仏の原・三輪

早稲田大学図書館(三十九冊)

あふひのうへ・あさかほ・あたちか原・「あま」・うかひ・うねめ・梅かえ・老松・をはすて・女郎花・春日龍神・俊

寛・鞍馬てんく・「皇帝」・実盛・志賀・鍾馗・誓願寺・関寺小町・殺生石・卒都婆小町・大会・当麻・てんこ・東岸
居士・道成寺・朝長・にしき木・軒端の梅・百萬・「松風村雨」・三井寺・紅葉かり・やたてかも・山うは・夕かほ・
養老・吉野静・籠太鼓

慶應義塾大学附属斯道文庫(三冊)

井筒・「かよひ小町」・富士太鼓

中京大学図書館(四冊)

女郎花・千手重衡・龍田・「八嶋」

国文学研究資料館(一冊)

忠度

個人蔵(七冊)

「項羽」(落合博志氏蔵)・二人しつか(佐々木孝浩氏蔵)・張良(高木浩明氏蔵)・かつらき(高橋悠介氏蔵)・清経・道
明寺・「楊貴妃」(伊海孝充蔵)

所蔵先不明(十八冊)

うき舟・うとふ・うのは・雲林院・杜若・景清・かんたん・くれは・桜川・自然居士・撰待・「はしとみ」・舟橋・みちもり・盛久・遊行柳・ゆみやはた・杜若(整版本)

新出本の所収曲はすべて天理本に含まれるものであり、新出曲は一曲もなかった。古玉屋本にはないが、整玉屋本に含まれる曲(小塩・白鬚・檜垣・松虫)については、版面の特徴などから、古活字本も存在した可能性が高いことを推測したが(二二二)、今回の新出本にもこれらは含まれていなかった。

なお、新出本に含まれる整版本「杜若」については後述する。

【装幀・版式】

新出本と天理本の装幀は全く同一である。表紙は栗皮表紙で、左肩に近衛流書体の刷題簽がある。ただし、新出本は全体的に虫損・破損が多く、題簽は剥落しているものが数冊ある。

両本の本文が近衛流の活字を用い、半丁七行、一行十五字内外で印刷されている点も全く同じであり、それだけではなく今回調査ができた約七十冊を見るかぎり、ほとんどが同版である。周知のとおり、古活字版の木活字は耐久性に難がある。そのため破損した活字を入れ替える場合もあるので、部分的に異なる活字が用いられている書籍も比較的多い。古玉屋本も数カ所の異植字部分を確認でき、例えば「うねめ」の十一丁三行目の「楽」は両本で異なる。しかし、このような異植字箇所は僅少で、部分的である。

その中で「朝顔」「うき舟」だけは大幅の活字の入れ替えが見られる(ただし詞章は変わらない)。「あさかほ」は一丁目のみが異版となっており、表裏を合わせて全部で十箇所以上の差異が認められ、とくに裏面に異植字箇所が集中

【写真1】「あさかほ」一丁表

A 天理本(天理大学附属天理図書館蔵)「謡曲百
番 玉屋本」

【写真2】「うき舟」一丁表

A 天理本(天理大学附属天理図書館蔵)「謡曲百
番 玉屋本」

B 新出本(「青裳堂書店古書目録平成二十七乙
未霜月」より転載)

B 新出本(「青裳堂書店古書目録平成二十七乙
未霜月」より転載)

している(写真1)。写真は表面のみ)。ただし、すべてが全く異なる活字を用いているわけではなく、裏面四行目と六行目の「候」が天理本と新出本とは入れ替わって用いられているような例も見られる。また異植字部分の活字は新刻のものでもなく、他の冊や丁で用いられている活字である。

「うき舟」は現在個人蔵となっており、原本調査はできなかったが、『青裳堂書店古書目録』から一丁目表が異版であることが確認でき、全部で二十箇所ほどの差異が認められる(写真2)。一行目の「われ」のように一見して異なる活字もあれば、二行目「是」・三行目「はつ」などのように活字の摩滅のように見える差異もあるが、これらもすべて異なる活字であろう。

今回は「うき舟」冊を全丁比較することができなかったため、憶測になってしまうが、他の冊が細かな差異に留まっていることと先の「朝顔」の例を参看するなら、「うき舟」もこの一丁目部分のみが異版であった可能性が高いのではないだろうか。古玉屋本が嗟峨本のように意図的に活字の組換えをしたとは考え難いので、技術的な問題の中で生じた異版だったと思われる、その差異が全丁に及んでいる可能性は低いのではないだろうか。「うき舟」の半丁を比べると、とくに天理本の節(ゴマ点)に印刷の不鮮明な部分が目立つ。それを是正するときに、文字活字の入れ替え(入れ違い)などが生じたこともあり得る。以上は推測の域をでないので、新出本「うき舟」を調査する機会を得たら、再考したい。

天理本と新出本の間隔を考える場合は、どちらが先印本であるかという点が重要となる。伝本が少ないこと、ほぼ同版本であることを踏まえるのなら、両本はそれほど間隔を空けずに刷られたと推測されるが、全体的に新出本の版面の方が鮮明であり、こちらが先印本であると思われる。また欠損した活字に注目すると、両本の同じ箇所と同じ欠損活字が用いられている例が多いが、「藤戸」一丁表六行目の「波」(写真3)、「ぬえ」三丁裏三行目の「人」

【写真3】「藤戸」一丁表六行目の「波」の活字

A 天理本(天理大学附属天理図書館蔵「謡曲百番 玉屋本」)

【写真5】「西行桜」三丁裏三行目の「なから」の活字

A 天理本(天理大学附属天理図書館蔵「謡曲百番 玉屋本」)

B 新出本(能楽研究所蔵)

B 新出本(能楽研究所蔵)

【写真4】「ぬえ」三丁裏三行目の「人」の活字

A 天理本(天理大学附属天理図書館蔵「謡曲百番 玉屋本」)

B 新出本(能楽研究所蔵)

(写真4)の活字のように、天理本のみが欠損している活字が散見できるので、やはり新出本の先印と考えてよいと思う。ただし、「西行桜」三丁裏三行目・七丁表四行目(写真5)に用いられている「なから」のように、わずかに新出本のほうに欠損が目立つ活字もあるので(これらは天理本の方にも欠損が確認できる)、新出本全冊が先印ではない可能性も考えられよう。

ちなみにこの「うき舟」の一丁目を整玉屋本と比べると、天理本の方がこれと一致する(「朝顔」は整版本が現存していないため、比較できない)。ただし、整玉屋本が天理本を底本に製作されたとは言えそうもない。先に言及した他の異植字部分を比べると、天理本と一致する場合と、新出本と一致する場合があり、整玉屋本をどちらかのセットと関係づけることができないのである。

【書き入れ等】

約半分の冊には直シや囃子の手が墨書もしくは朱書されており、裏表紙見返しに「林氏」と朱書されている冊もある。しかし、これら以上に注目すべきは表紙裏張りに使われている反古紙である。これについては、次節で詳しく見ていきたい。

二、表紙裏張りの反古紙

新出本が売り出された時、この本が注目されたのは伝本が古玉屋本であったということ以上に、表紙裏張りに当時の出版状況の究明に繋がり得る表紙屋（製本屋）の書状や控えなどが用いられていたためであった。これらの反古紙のうち、書状などは難読箇所も多く、現段階ではすべてを読解するに至っていないので、今回はまずその文書群の概要を紹介することとし、その全容は別の機会に示したい。

表紙裏張りに反古紙が用いられている冊・内容を整理したのが、【表】「古玉屋本新出本の表紙裏張り反古紙一覧」である。今回調査ができた反古紙は二十七冊分であるが、『青裳堂書店古書目録』によると、他にもうき舟・うとふ・うのは・雲林院・景清・かたん・くれは・こうう・自然居士・撰待・はしとみ・盛久・遊行柳・ゆみやはこの十四冊の表紙裏張りにも反古紙が含まれているらしく、それから判る情報は表の下段にまとめた。以上の情報を①年記、②人物、③書名の三点から、玉屋謠本研究から少々逸れることも含めて分析してみたい。

①年記

これらの反古紙には僅かながら年記の墨書を見出すことができる。「阿漕」には元和六年（一六二二）、「雲林院」には

【表】古活字玉屋謡本新出本の表紙裏張り反古紙一覧

曲名	種類	年月日	人物名	内容	
調査済資料					
阿漕	受取控	元和6年2月12日	安兵衛・太兵衛	表紙にうたひの本・つれつれ草・なんきやう・せいかうはう?・大坂物語・こか、みの書名と部数。	
	書状			表紙に上段にメモ書き、下段に書状の一部。	
	受取控		とらや	表紙にとらやかの受け取り部数を印したメモ。日付のみあり。	
	あたか	受取控			表紙に千字文・まんちう・花鳥・らくし?・ほうりやく・大せいろん・せつせつ?・こきやう・ふしみときは・山中・とかし・しゆてんたうし・大しやくはん?・うつせみ・ゐんきやう・かまた・人あな・水か、み・犬たんかの書名と部数。
		書状		安兵・藤左衛門	藤左衛門の名が見える書状。安三宛。
		断簡	慶長19年2月23日	太兵衛	太兵衛に宛てた文書の宛名・日付部分のみ。
		書状	11月19日		不参を詫げる書状の一部か。
	受取控		太兵衛	拾芥・らくこく?・節用集・大しよくわん・十番きり・いせものかたり・か、くたふ?・せいかうはう?・人あなの書名と部数。	
海士	受取控			表紙にろうゑひ・あつもり・ふしみ・いせものかたり・かまた・しきもく・水か、み・水か、み・八しま・もうじ・ゑほし折・大原問答・大しよくかん他数冊の書名と部数。	
井筒	受取控			表紙に三重韻?・水か、み・さうし・八嶋・与一・はり?・いつみ式部・つくは、八けい・かまたの書名と部数。	
江口	受取控	慶長19年2月10日	新兵・大兵衛・久作・■介	うたひ・古文しんほう・わこく・太平記・ちう(太平記注の意か)・千字文・ろうゑい・しきもく・■■■■しの書名と部数。「新兵」から他の三人に宛てたもの。	
女郎花	書状?			表紙に大文字の墨書。書状の一部か。	
かよひ小町	書状			表紙に書状らしき文書の一部。	
				裏表紙にそれうきん?・三国佛法・式目・らうゑい・させき・ほつけさん?・あうきしう・太平記抄・人あな・せんちやう抄?の書名と部数。	
鞍馬天狗	落書			表紙に文字を練習したような墨書	
	書状?		久三郎・与三右衛門	裏表紙に手紙の宛名と思われる墨書	
志賀	受取控			表紙に堀川・八嶋・ゑほし折・大しよくわん・水鏡・かたま・与一・つくは、はけい・かまたの書名と部数。	
殺生石	受取控			表紙に十番斬・信長記・ゐんきやう・いせ物語・阿弥陀むねわり・あつもり・ろんこの書名と部数。	
千手重衡	書状?			表紙に大文字の墨書。書状の一部か。	
	書状?			裏表紙に大文字の墨書。書状の一部か。	
龍田	書状?			表紙に墨書。難読。	
	受取控			裏表紙に 阿弥陀むねわり・あつもり・かけきよ・つき嶋・千字文・ろんご・大坂物語・十はんきり・伏見ときわ・風月・はけい・阿弥陀むねわり・しつかの書名と部数。	
張良	受取控		■斎殿	うたい本・うたひ・こふん・太平記・■■■■ちう・千ちもん・らうゑい・しきもく・■ちきんの書名と部数。	

てんこ	落書	正月日		表紙に大文字の墨書
東岸居士	書状			表紙に墨書。難読。
道成寺	落書			表紙に大文字の墨書。
とおる	書状			書状の一部。
ぬえ	書状	六月三日	■■■門	書状の一部。
	受取控	慶長19年2月10日	新兵・太兵衛	伊勢物語・あふさぎうし・いつみしきふ・あつもり・大せろん・はつけい・うつせみ・つれつれ草・三十ろん・うたひ・百人一首・わたさかもり・八しま・つきしま・ろうゑい・かうしノろんき・かまた・まんちう・いつみの書名と部数(判読不能の書名あり)。
班女	受取控			表紙にろうゑい・金言冊・大原問答・節用集・しきもく・りんさいノ六・朝養経・和玉・節用集・つれつれ草・二鉢千字文・大學の書名と部数など。
富士太鼓	受取控			裏表紙にかまた・人あな・水か・み・犬たんか・うつせみ?・あふさぎうし・人あな・花鳥・らくし?・まんちう・山中・あみたむねはり・あつもり・かげきよ・つき嶋の書名と部数。
藤戸	書状			本の問い合わせに対する返信。
	断簡	正月十七日		表は書状の一部。裏には春日龍神・養老・はうしやう川・ありとをし・たまのみと墨書。
	断簡			表は書状の一部(御馳走の御礼らしい)。裏にはひかき・二人しつか・かきつはた・はせをと墨書(一曲判読不能)。
二人しつか	書状?			書状らしい文中に、「うたいの本 五部」「せいかうはう一部」の文が見える。
三井寺	受取控		安兵衛	表紙に伏見ときは・風月・はつけい・あみたむねはり・しつかの書名と部数。
三輪	受取控	慶長19年9月24日	太兵衛	受取控らしいが、一部しか見えない。
紅葉かり	断簡	慶長19年		書状の一部か。
八嶋	受取控		安兵衛・八嶋寺?・右馬介?殿	表紙に墨書。上段は本、下段はお金?の受取控。
山うは	断簡			「二条油小路」の地名が見える。
頼政	受取控			堀河・いつみ式部・はけい・水か・み・はま出・しゆてんたうし・阿弥陀むねはり・うつせみ・花鳥・かまた・人あな・いつみ式部・まんちう・つくは・大しよくかんの書名と部数。
	断簡			表は書状の一部。裏にはゆや・忝風・江口・井筒・籠太鼓と墨書。
	断簡			表は書状の一部。裏にはさねもり・きよつね・よりまさ・ともなか?・忠則と墨書。
未見資料				
雲林院		元和2年	鳥羽安兵衛	鳥羽安兵衛書状あり。
かんたん		元和7年		
盛久		慶長19年		

《その他の裏張り文書がある冊》

うき舟・うとふ・うのは・景清・くれは・こうう・自然居士・撰待・はしとみ・遊行柳・ゆみやはた

元和二年(六二六)が見え、『青裳堂書店古書目録』に拠れば未見の「かんたん」には元和七年の年記があるらしい。また「大坂物語」の書名が見える「龍田」も元和元年以降の文書であることが確実である(「阿漕」にも大坂物語の書名がみえる)。それ以外では、「安宅」「江口」「ぬえ」「三輪」「紅葉から」「盛久」の六冊からは慶長十九年(六一四)の年記が見えるので、この文書群が書かれた時期には少なくとも七年もの幅があるが、新出本が七年にもわたって刊行されていたとは考えにくいので、全冊元和七年以降に刷られたと考えるべきだろう。また天理本は新出本が後刷りで、それほど間隔をあげずに印刷された可能性が高く、さらに伝本が僅少である現状を踏まえると、古玉屋本全体も元和七年以降の刊行と推測される。先行研究では古玉屋本の刊行時期を「元和初年」(『鴻山文庫藏能楽資料解題』)と推測し、「(一)」「(二)」ではそれを明言してこなかったが、この本文書群の年記と光悦謡本系の詞章をもつという特質を踏まえて考えるに、元和七年からそれほど隔てず刊行されたと考えたい。

「(二)」で述べたとおり、古玉屋本は光悦謡本の異本とも言ってもよい内容なので、「元和七年」以降という刊年は少々遅いようにも思えるが、それと同時に問題となるのが元和卯月本との関係である。元和卯月本は奥付年記が元和六年であるが、これは刊行企画発足年であり、実際の刊行は元和九年ごろであることが、表章の研究によって明らかになっている(『元和卯月本』考(『国語』四二二、一九五五年九月。後『能楽史新考(二)』(わんや書店、一九七九年所収)。すなわち、古玉屋本は元和卯月本よりも若干早い刊行ではあるが、ほぼ同時期の成立となるのである。この元和卯月本との関係は、観世身愛の関与を含めて、玉屋謡本の製作背景を考える上で考慮すべきだろうが、「(二)」で考察した光悦謡本・卯月本の本文異同も踏まえて、次稿にまとめてみたい。

②人物

【写真6】「阿漕」(能楽研究所蔵)の表紙裏張り文書

(上段)

跡刷の本 請取部

覚

元和六年

二月十二日

(下段)

一 うたひの本 卅四部

安兵衛

内 三部 ■■■後

太兵衛様

外 三十壹部也

まいる

一 つれ／＼草 壹部

一 なんきやう 三部

一 せはゝゐう 百六十七部

一 大坂物語 三十七部

一 こかゝみ 壹部

この文書群には、約十名の人物名が見えるが、その中で最も多く登場するのは、「太兵衛」と「安兵衛」である。両者の関係は、例えば元和六年の年記がある「阿漕」の文書を見ると、次のようになっている(写真6)。

この文書は安兵衛が受け取った書籍の部数を記した覚書を太兵衛に送ったものと考えられる。この文書が表紙の裏張りに使われていたということは、太兵衛が表紙屋で、安兵衛が本の製本依頼者であった可能性が高いだろう。太兵衛と安兵衛は素性不明の人物である。未調査本の「雲林院」の表紙裏張りに用いられている書状に拠れば、安兵衛は

「鳥羽安兵衛」という名であったことがわかるが、それ以上のことを解明するに至っていない。先の「阿漕」の文書などに拠れば、謡本刊行に何らかのかたちで関わっていた可能性はあるが、玉屋謡本刊行に関与していたかは現段階でははっきりしない。

この二人以外で注目したいのは、「阿漕」の表紙裏張りのみに見える「とらや」である(写真7)。能楽界で活動した虎屋といえ、禁裏の催しにたびたび出演した手猿楽の虎屋がいるが、この一族(一座)は観世流謡本と少なからず関係がある。能楽研究所蔵「寛永二年写観世暮閑巻」は黒雪から「トラヤ弥吉」に相伝された小謡集であるが、この人物は新兵衛ともいい、江戸時代初期に禁裏を中心に活動した観世流の手猿楽役者である。

【写真7】「阿漕」の表紙裏張り文書

さらに虎屋が謡本刊行にも関与したことが二つの資料から知られている。一つは光悦謡本袋綴本別製普通本と呼ばれる種である。現在、この種は八坂神社蔵本(一〇〇冊)・法政大学鴻山文庫蔵本(二二冊)・法政大学能楽研究所蔵本(三冊)・国立能楽堂蔵本(四冊)のみが伝わっているが、一九四一年四月『巖松堂書目』に現所在不明の九十七冊本もあったことが知られており、この本が収めてある箱に慶長十五年の年記と「虎屋良有判之本」という墨書があったらしい。宮本圭造の研究に拠れば、虎屋良有は『佐渡相川砂子』の柳原勘右衛門の記事に「虎屋了字ヨリ其道ヲ伝授」とある人物と同一で、京都で謡伝授の活動してたことがわ

かるシンボジウム「縦断横断光悦謡本」(二〇一六年二月二十七日の口頭発表「周縁から見る光悦謡本」)。光悦謡本の箱の墨書を信じるのならこの人物が光悦謡本袋綴本の一種を刊行したことになる。

もう一つは鴻山文庫にのみに伝わっている「古活字虎屋中本 姨捨」の一冊である。この本は原裝紺色表紙(二〇・五×一四・五糎)で、左肩に長形題僉剥落の跡があり、その上に「おはすて」と墨書されている。漢字平仮名交じり、片面六行十五文字内外、全丁句切り点、役名交代を示す鉤印がないという版式で、全十一丁である。奥付には整版印刷で「右此百番者虎屋正本也」とあるので、この本が百冊の内の一冊であり、しかも「虎屋正本」なる謡本に拠っていることがわかる。ただし、この本の刊行に虎屋自身が関与したかは、この奥付からは判断できず、表章は「光悦謡本の袋綴別製普通本が虎屋良有刊と考えられることを参照すると、虎屋刊の本に基づく別人刊行の本と推測される」と虎屋刊行に対して否定的な推測をしている(鴻山文庫蔵能楽資料解題)。

この謡本も現存していない光悦謡本袋綴別製普通本を収めていた箱も、虎屋が謡本刊行に関与した確たる証拠とはいえないものであったので、新出版の表紙裏張り文書は虎屋と謡本出版とを結びつける最も有力な資料となる。問題はこの虎屋が表紙裏から受け取ったらしい本がどの本であったかという点である。「上下」という記述の意味が判然としないが、「百はん」などという書き方から考えるに謡本であることは間違いないと思われ、しかも百番程度の揃本であったと推測される。

古活字虎屋中本が「虎屋正本」に拠っていたとすると、「とらや」が刊行した本も「虎屋正本」をもとにした可能性が高いが、古活字虎屋中本「姨捨」は光悦謡本のそれとを比較すると、次の二箇所のみ異なる(元和卯月本は光悦謡本と大異)。

二段「問答」

(虎屋中本)ふしきやな山路も見えぬかたよりも 女性一人顕れて

(光悦謡本)ふしきやな山路も見えぬかたより。女性一人顕れて。

一一段「歌」

(虎屋中本)をはすて山とそ成にけるをはすて山となりにけり

(光悦謡本)姨棄山とそなりにけるをはすて山となりにける

古玉屋本はこれらの箇所を含めて光悦謡本と異同はなく、整玉屋本は元和卯月本とほぼ一致し、光悦謡本などとは大異である(一一段「歌」は古活字虎屋中本と同じ)。「姨捨」だけに限って言えば、虎屋正本は光悦謡本に近いが少し異なる部分がある詞章であったということになるが、この一冊だけから看取できる特徴をもってどの本を刊行していたかを考えることは難しい。ただし、慶長末年から元和頃に刊行された百番揃の本はけっして多くないので、その一つである古玉屋本を虎屋が刊行した可能性もないわけではないだろう。

③書名

この文書群には慶長末年から元和にかけて製作された書籍の名前が数多く見える。これらはすべて刊本だとすると、それらの刊行時期を推測するための貴重な資料となる。

慶長十九年の年記がある「ぬえ」の表紙裏張り文書(写真8)には、二十以上の書籍名が見えるが、「あつもり」「わたさかもり」「つきしま」などは舞の本だと思われる。舞の本の刊本としては東洋文庫岩崎文庫や名古屋市立鶴舞図書館に所蔵されている古活字本が最も古いが、刊記などはない。この文書にある書名がこの古活字本であった可能性は高いと思われる。

【写真8】「ぬえ」の表紙裏張り文書

また「いつみしきふ」は室町物語「和泉式部」のことだろうが、この物語も最古刊本は丹緑本なので、慶長末年の刊行ということになる。現存本より古い刊本が存在していた可能性もあろう。さらに「あふきさうし」は扇絵入りの歌集「扇の草子」のことであろうが、その版本は東洋文庫岩崎文庫蔵「あふきのそうし」とそれと同じ板木を用い、丁付を加えた国文学研究資料館蔵「扇の草子」が古く、安原真琴の研究に拠れば、前者は「慶長十五年を上限とし、下限は寛永初頭」に刊行されたと推測されている（『扇の草子』研究―遊びの芸術―ペリかん社、二〇〇三年）。

この文書の「あふきさうし」はこうした版本のことを指していると考えられる。

【写真9】「江口」の表紙裏張り文書

この文書には先述の「とらや」文書を除いて、「うたひ」「うたひの本」の記述も四文書から見える（阿漕・江口・ぬえ・張良）。興味深いのは「江口」の文書に「いろいろかみのひうし有」「張良」の文書に「但いろいろかみ／ひやうしあり」という記述もある点である（写真9）。この色紙表紙は古玉屋本のような栗皮表紙・元和卯月本のような藍色表紙を指しているとは考えづらく、複数の色紙を用いた色替り表紙のことだと考えられるが、

江口にも慶長十九年の年記があることを考えると、光悦謡本の袋綴本であった可能性が高いのではないだろうか。なお、整玉屋本も色替り表紙であるが、古玉屋本が元和七年頃の刊行と推測されるだけに、慶長十九年に刊行されていたとは考え難い。

光悦謡本は帖装本と袋綴本に大別され、前者のうち上製本が慶長十年頃、特製本と色替り本が慶長十五年以前の刊行と推測されている(表章の一連の研究に拠る)。対して、袋綴本は最も製作が古いと思われる別製普通本が慶長十五年ごろの刊行で、その後帖装本とは異なる刊者によって他種も製作されたと考えられているので、慶長十九年という年は、先行研究が指摘する光悦謡本袋綴本刊行時期と一致する。「(二)」では、古玉屋本は光悦謡本とほぼ同じ詞章であり、とりわけ袋綴並製本甲種本に酷似することを指摘したが、この文書群の「うたひ」「うたひの本」の中に光悦謡本袋綴本の書名が含まれているとしたら、古玉屋本と刊者が同じとは言えないまでも、かなり近い環境で製作されていた証左になるのではないだろうか。

三、新出本に含まれる整版本「杜若」について

前述のとおり、新出本には光悦流書体の整版本「杜若」が一冊のみ含まれている。この本は現所在不明であるが、売り出される前に書店で一見する機会を得た。本文は古玉屋本とは全く異なる光悦流書体であったが、表紙は同じ粟皮表紙で原装だと思われた。新出本には古活字本の「杜若」が含まれているので、刊行者が装幀を整えて不足分を補ったとは考えられないが、同じ表紙屋で製本されているだけに、かなり近い環境で刊行されたことは間違いないだろう。

結論からいえば、この整版本「杜若」は「(二)」にも言及した肥前島原松平文庫蔵「観世黒雪本謡曲」(以下「松

【写真10】「杜若」一丁表

A 新出本に含まれる整版本（青裳堂書店
古書目録平成二十七乙未霜月）より転載）

平文庫本」と同版であった（写真10）。これと同種本で、寛永十三年の年記をもつ本が早稲田大学演劇博物館（五番綴十一冊）と鴻山文庫（一番綴五冊）とに所蔵されているが、新出本に交じる整版本「杜若」にはその刊記はなく、後述する松平文庫本と同じ墨印があるので、松平文庫本と緊密な関係にあることは明らかである。

松平文庫本は次のような本である。

肥前島原松平文庫蔵「観世黒雪本謡曲」半紙本 九十三冊

袋綴。紺表紙（二三・九×一六・九糎）。左肩長形刷題簽に光悦流書体で曲名を刻す（ただし剥落冊が多い）。内題なし。無辺無界。半葉七行。咽に曲の略称（浮舟↓うき）と丁付を刻す。奥付「此百番者観世／黒雪斎以章句／之正本写之者也」。本文末に「くわんせこく／せつのしやう／くのうつし」の朱印を押捺する冊がある。本文料紙は虫損が激しく、厚手の楮紙で補修してある。またほぼ全冊にわたって、朱で詞章の直しが加えられている。

松平文庫本は新出本に交じる整版本と版式と墨印こそ同一であるが、装幀は全く異なる。ただし、その装幀には少なからず問題がある。この本は曲によっては咽に接近して印字してあるものもあり、後人が改装したのではないかと思われるところがある。その場合、古玉屋本と同じ表紙

B 松平文庫本（肥前島原松平文庫蔵「観世黒

雪本謡曲）

が原装であったかはわからないが、当初は異なる装幀であった可能性があるだろう。

松平文庫本と同版の「杜若」が一冊だけとはいえ、古玉屋本と同じ装幀でそれに含まれていたということは大きな意味があると思われる。「(二)」で、整玉屋本は独自性を認めうる特徴はあるが、「玉屋謡本系」と呼びうる系統は考へる必要はないと問題提起した。その根拠は、整玉屋本は光悦謡本系の詞章を基調としながら、一部独自の本文をもつものの全体的には元和卯月本系の詞章へと接近している謡本だが、こうした詞章をもつ謡本は整玉屋本以外にもあること、整玉屋本の詞章が後代の謡本に必ずしも引き継がれていないことの二点にあった。その考察の中で、整玉屋本と同じような性格、すなわち「光悦謡本系の詞章を基調としながら、一部独自の本文をもつものの全体的には元和卯月本系の詞章へと接近している謡本」の一つとして挙げたのが松平文庫本であり、整玉屋本と近い環境で刊行された可能性があることを指摘していた。整玉屋本ではないが、古玉屋本の新出版に同装幀の松平文庫本が含まれていたということは、その推測を一層強める材料となる。そこで、玉屋謡本と松平文庫本の関係をその両者と密接な関係のある他本と併せて検討したい。

「杜若」の本文について言えば、光悦謡本・古玉屋本・元和卯月本間には異同がない。対して整玉屋本は光悦謡本とは次の一箇所のみが異なる。

三段「問答」

光悦謡本(上製本) なふく御僧

整玉屋本 なふくあれ成御僧

この箇所を含め松平文庫本は整玉屋本と同一で(黒雪中本は「杜若」はなし)、この両本は非常に近い関係にあることが伺えるが、わずかこの部分の一致だけで両本の間関係を論じることではできなし、他曲を見ると松平文庫本は必ずし

【写真11】

松平文庫本の朱印(肥前島原松平
文庫蔵「観世黒雪本謡曲」の「ありとほし」)

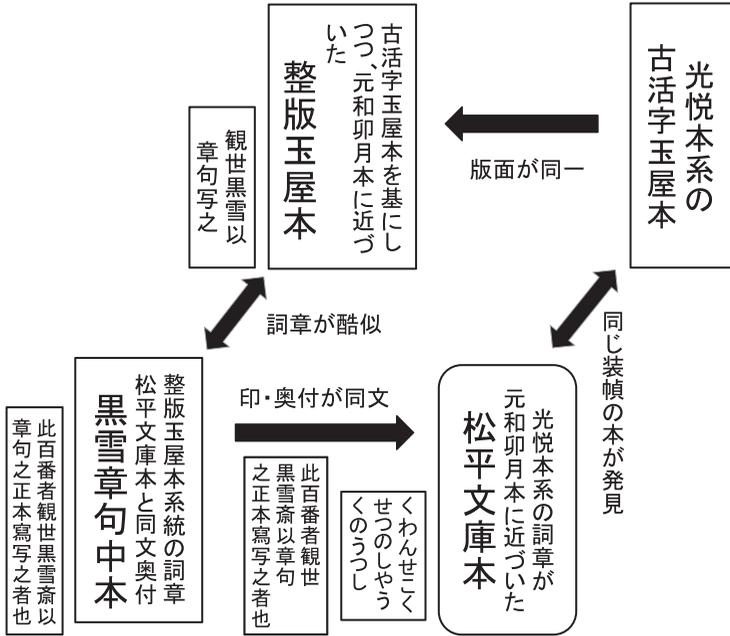
も整玉屋本系というわけではない。

そもそも松平文庫本の詞章は光悦謡本・元和卯月本・整玉屋本の三者の關係から把握することは非常に難しい。半数ほどの曲は光悦謡本の一
致(もしくはほぼ一致)するので、先行研究で指摘されているように、光
悦謡本系の謡本とも言えるが、もう半数の曲の中には卯月本・整玉屋本
と一致(もしくはほぼ一致)する曲もあるので、松平文庫本一セットとし
て系統分けすることが困難なのである。また「(二)」で指摘した(整玉
屋本独自詞章)二十箇所を見ると、光悦謡本と一致する箇所が十三箇所
(c・f・g・i・j・m・n・p・q・r・s・t・u)、整玉屋本と
一致する箇所が七箇所(a・b・d・h・k・l・o)であった(二二)四
二頁(四九頁参照)。(整玉屋本独自詞章)がある曲もあるという点では、光悦
謡本・古玉屋本とは一線を画すが、光悦謡本に近い詞章も多いのである。
これらの本文比較に基づくのなら、松平文庫本の本文は「整玉屋本系
統」ではないが、整玉屋本と同様に光悦謡本系の本文を元和卯月本系の
本文へと改訂する過程の過渡的な形態だといえるだろう。「(二)」で指
摘したように、松平文庫本には板木自体を光悦謡本系から元和卯月本系
に訂正箇所がある。もともとは古玉屋本のように、光悦謡本の詞章をも
とにしていたが、曲によっては元和卯月本系・整玉屋本系の本文などを

【写真12】

松平文庫本の墨印(肥前島原松平
文庫蔵「観世黒雪本謡曲」の「まつむし」)

【図】 黒雪章句を写したとある謡本の関係



参照しつつ、本文を改訂しながら製作された謡本だと考えられる。

玉屋謡本と松平文庫本の親近性は、こうした詞章の特色だけでなく、本文末に押捺されている印からも伺える。

整玉屋本には「観世黒雪／以章句写之」と刻す朱印と「観世黒雪以／章句写之」と刻す墨印が用いられていたが印の写真は「(一)参照、松平文庫本にはこれと内容の二種の印が見られる。一つは「くわんせこく／せつのしやう／くのうつし」という朱印で(写真11)、もう一つは「此百番者観世／黒雪齋以章句／之正本寫之者也」という有枠墨印(写真12)で、この一方か両方が押捺されている。朱印は鴻山文庫蔵黒雪章句仮名印本にも見られるが、この本は松平文庫本と同版本である。墨印は鴻山文庫蔵黒雪章句中本(以下「黒雪中本」と表記)の二行の整版奥付を三行に分かち有枠印にしたものである(ただし、先後関係は不明)。すなわち、松平文庫と黒雪中本には何らかの影響関係がある

ということだが、その黒雪中本は整玉屋本とほぼ同一の詞章なのである。ところどころ光悦謡本・古玉屋本の方と一致する本文もあるが、〈整玉屋本独自詞章〉はすべて同文であり、明らかに整玉屋本と影響関係がある謡本なのである。その謡本が松平文庫本の墨印と同文の奥付を持っているのである。

ここまでの説明が複雑になってきたので、これらの関係を整理したのが【図】「黒雪章句を写したとある謡本の関係」である。整玉屋本は古玉屋本をもとに版下が作られているが、詞章は一部改変され、元和卯月本に近づいており、「黒雪の章句を写した」という印が押捺されている。古玉屋本と同装幀の本が出現した松平文庫本は、整玉屋本と酷似する詞章をもつ黒雪中本の奥付と同文の印が押捺されている。印文こそ異なるが「黒雪の章句を写した」と印す数種の謡本は直接的・間接的に繋がりをもっているのである。古玉屋本の新出版に松平文庫本が同装幀で含まれていたということは、これらの諸本がかなり近い環境で製作されていた可能性を一層強く示唆してくれるのではないだろうか。

さらにこれらの諸本の関係は、江戸時代初期の観世流謡本の詞章の変遷過程についても興味深い問題提起をしてくれる。光悦謡本とほぼ同じ詞章をもつ古玉屋本には奥付や印はないが、光悦謡本の詞章が元和卯月本へと近づいている整玉屋本・松平文庫本・黒雪中本には「黒雪の章句を写した」と記す印や奥付がある。すると、この「黒雪の章句を写した」という意味は元和卯月本系の詞章で本文を改編したということを意味しているように思えるのである。

観世身愛が隠居して「黒雪齋暮閑」を名のるのは元和七年ごろだと考えられている。表章『観世流史参究』(檜書店、二〇〇八年)。この年代は本稿で想定した古玉屋本の刊年でもあり、その一年前は元和卯月本の刊行準備が始まった年でもある。すなわち、現存資料を見る限り、身愛が「黒雪」を名のった頃に、観世流謡本の出版は活発化していったと想像されるのである。この身愛の隠居時期の周辺というのは、観世流謡本刊本の歴史を考えるとときに重要なポイントとなるのである。

はないだろうか。ただし、もっとも重要な問題はこれらの謡本を誰が主導で刊行したのか、身愛(黒雪)が関与したかという点であるが、この問題が観世流謡本刊本黎明期の最大の謎だといえよう。このことについては、玉屋謡本研究のまとめとして、次稿で私見をまとめてみたい。

小括

以上、新出本の紹介とこの本をもとに、玉屋謡本の成立背景を考察してみた。新出本の紹介も不十分であり、隔靴搔痒の感は否めないが、謡本に限らず近世初期出版研究にも有益な資料だけに、今後他分野の研究にも活用され、明らかになることも多いだろう。諸氏のご叱正を乞いたい。

(未完)

【付記】

本稿に用いた資料の閲覧・調査や写真掲載に際しては、落合博志氏・後藤憲二氏・佐々木孝浩氏・高木浩明氏・高橋悠介氏・竹本幹夫氏・柳沢昌紀氏・中京大学図書館・天理大学附属天理図書館・肥前島原松平文庫・早稲田大学図書館にご高配賜った。記して御礼申しあげたい。なお本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金若手研究(B)「近世初期観世流謡本刊本変遷過程をめぐる研究―玉屋本の書誌的研究を中心に―」の研究成果の一部である。